

シドニー・ライカートにおけるイタリア系コミュニティの拠点再構築の試み

吉田道代*・葉 倩瑋**・筒井由起乃***・松井圭介****・堤 純****

*和歌山大学観光学部, **茨城大学人文学部,

追手門学院大学国際教養学部, *筑波大学生命環境系

本稿では、人口規模が縮小し、居住地が分散しつつあるシドニーのイタリア系コミュニティが、移民集団としての民族文化を表象する場所を1世の集住地ライカートに求め、コミュニティの拠点を再構築しようとする試みに注目した。

ライカートは、1950年代にイタリア系移民1世の居住・商業活動の中心であったが、1970年代以降イタリア系住民の数が減少し、そのビジネスも縮小していった。この状況下で、1999年に同地区にイタリアの景観・文化をイメージした商業・居住・文化活動の複合施設、イタリアン・フォーラムが建設された。しかしこの施設は2000年代末には商業的に行き詰まり、イタリア系コミュニティの歴史や民族文化を表象するアイデンティティの場所としても機能しなかった。それでも現在、イタリア系住民の互助組織がこの施設内のイタリアン・フォーラム文化センターを利用し、イタリア系コミュニティの拠り所となる場所づくりをめざしていることが明らかとなった。

キーワード：シドニー、ライカート、イタリアン・フォーラム、イタリア系移民

I 研究課題と調査方法

1788年にイギリスからの本格的な入植が始まって以来、オーストラリアに移住する人々の出身国は大きく変化してきた。この中で本稿が対象とするのは、1950年代から60年代にかけて入国した移民労働者とその家族・子孫を中心とするイタリア系コミュニティである。

オーストラリアは、白豪主義の下、第二次世界大戦終了までイギリス・アイルランド以外からの移民の受け入れを制限しており、アングロ・ケルト系（イングランド・アイルランド出身の白人）を主流とする民族的同質性が極めて高い社会を形成していた。イタリアからの移民は白人として労働契約の対象にされたものの、英語を第一言語とせず、民族的にもアングロ・ケルト系ではないことが懸念されていた¹⁾。このように、オーストラリアにおいてイタリア系移民はエスニック・マイノリティとみなされていたが、一方でヨーロッパの白人であるという点から、主流社会への同化

可能な集団として受け入れられた（Jupp, 1998: 110）。しかし、イタリアからの移民は特定の地域に集住し、そこを拠点にイタリア語で生活するための組織を作り、イタリア系住民を顧客とするいわゆるエスニック・ビジネスに従事する者が増加した。こうしたコミュニティとしての動向は学術的な関心をよび、ギリシャ系移民とともに、第二次世界大戦後のオーストラリアの多民族化を最初に顕在化させた集団の一つと認識された（Jupp, 1998）。しかし、1970年代以降、イタリアから移住する移民の数が減少した結果、国内のイタリア系住民の人口規模は縮小し、コミュニティの内部も変化してきた。

このような変化について、地理学ではBurnley（2001: 2005）が居住パターンの変遷および世代による職業を含めた属性の変化に焦点を当てて調査している。その研究によれば、イタリア系住民のコミュニティは次のように変わってきた。まず、移民1世の高齢化が進み、人口の中心は2世・3世になった。また、1世の労働者が主に工場や

建設現場に従事していたのに対し、2世・3世はオーストラリアで教育を受けて職業の上昇を果たし、総人口の職業割合に近づいていった。居住地については、1950年代・60年代にイタリアからオーストラリアに移住した1世の多くが、労働者向けの比較的家賃の低い住宅が集まる大都市のインナーシティで生活を始めた。しかし、住宅の購入で郊外に移住し、さらに2世・3世が独立した世帯を持つにつれて、1世の居住する地区の近隣やさらに外側の郊外に分散していった。こうした居住地の分散を受けて、インナーシティにあるイタリア系企業家のエスニック・ビジネスは減少していった。

このような状況で、イタリア系コミュニティにとっての移民1世の集住地の重要性は低下しているように見えるが、一方で、1980年代末にメルボルンやシドニーの都市再開発の一環として、イタリア系移民1世の集住地区でイタリア文化をイメージした建物や公園の造営計画が立ち上がった。本稿では、こうした建造物の一つとして、シドニーのイタリア系移民1世の集住地区ライカート (Leichhardt)²⁾ に建設された商業・居住・文化の複合施設、イタリアン・フォーラム (Italian Forum) に着目し、イタリア系コミュニティによる移民としての歴史と民族文化、アイデンティティを表象する場所づくりとの関わりを探究することにした。

本稿で使用される主な一次資料は、2009年から2015年までのライカートおよびイタリアン・フォーラムでの年1回の観察、2014年9月に実施したイタリアン・フォーラム内にある公立図書館職員、ライカート市役所 (Leichhardt Municipal Council) 職員、シドニーのイタリア系住民のコミュニティ組織 Co.As.It. 職員への聞き取り調査を通じて収集された³⁾。他に、Australian Bureau of Statistics (ABS) のセンサス (Census

of Population and Housing)⁴⁾ などの統計資料、ライカートやイタリアン・フォーラムに関する既存研究・文献・新聞記事⁵⁾ も二次資料として使用した。

次章以降の構成は次の通りである。II章では、オーストラリアでイタリアからの移民が増加した経緯とイタリア生まれの人口の推移について説明する。III章では、シドニー大都市圏におけるイタリア系住民の居住分布を基にライカートにおけるイタリア系住民にとっての居住地としての特徴を明らかにし、ここでのイタリア系住民の1970年代までのビジネス展開についてみていく。IV章では、イタリアン・フォーラムの歴史と現状を紹介し、同施設内のイタリアン・フォーラム文化センターの所有権をめぐる争いについて論じる。以上をふまえ、V章では、1世の集住地およびイタリアン・フォーラムのようなイタリアの民族文化イメージを用いた新しい建造物が、地元のイタリア系コミュニティによる歴史や民族文化、アイデンティティを表象する場所づくりにどのような意味を持つのかを考察してまとめとする。

II オーストラリアのイタリア系移民

先に述べたように、第二次世界大戦以前のオーストラリアは、イギリス・アイルランド以外の国に門戸を閉ざしていた。これが変更されたのは、対象をイギリス・アイルランドからの移民に限定しては、戦後の経済成長に必要な労働力を確保できないことが明らかになったからである。オーストラリア政府は、建設労働や工場労働に従事する人材を確保するために、1940年代半ばから1950年代初頭にかけて東欧難民を受け入れ、1950年代から60年代にはヨーロッパの多くの国々と政府間協定を結び、労働者の受け入れを行った (Jupp, 1998)。イタリアとは1951年に協定が結ばれ、これに基づき、1968年まで

の間に約4万2,000人が渡豪した（DIMA, 2001 : 36）。協定によらずに渡航した労働者も多く、これに家族呼び寄せが加わり、イタリア出身の移住者数は1950年代から60年代にかけて大きく上昇した。1949年から2000年にかけてのイタリアからの移住者総数は390,810人（全移住者数の6.9%）にのぼるが、その大半が1950年代から1960年代の期間にオーストラリアに到着している⁶⁾（Jupp, 1998 : 111 ; DIMA, 2001）。

このような動向を反映し、オーストラリアにおけるイタリア生まれの人口は、1947年から1954年にかけて大幅に上昇しており（図1）、外国生まれの出生国別人口において、イギリスに次いで2番目に大きい規模となった（DIMA, 2001 : 36）。しかし、1970年代初頭をピークに徐々に減少し、2011年現在には201,690人、外国生まれに占める割合は3.4%になった⁷⁾。

次に、イタリア生まれ人口の居住分布についてみると、その多くが都市に居住していることがわ

かる。2011年のセンサスによれば、メルボルン大都市圏では68,799人で、イタリア生まれ総人口の34.1%を占める。シドニー大都市圏では41,777人（イタリア生まれ総人口の20.7%）となっている（表1）。家庭でイタリア語を話す人口については、オーストラリア全体で299,829人（オーストラリアの総人口の1.4%）で、メルボルン大都市圏では112,682人（家庭でイタリア語を話す総人口の37.6%）、シドニー大都市圏では68,564人（家庭でイタリア語を話す総人口の22.9%）となっている。

このように、イタリア系住民は特にメルボルンとシドニーに多く、さらに、それぞれの都市圏内の特定地区に集住する傾向がみられた。次章では、シドニーのイタリア系住民の居住パターンを探るため、家庭でイタリア語を話す人口の分布をみていくこととする。

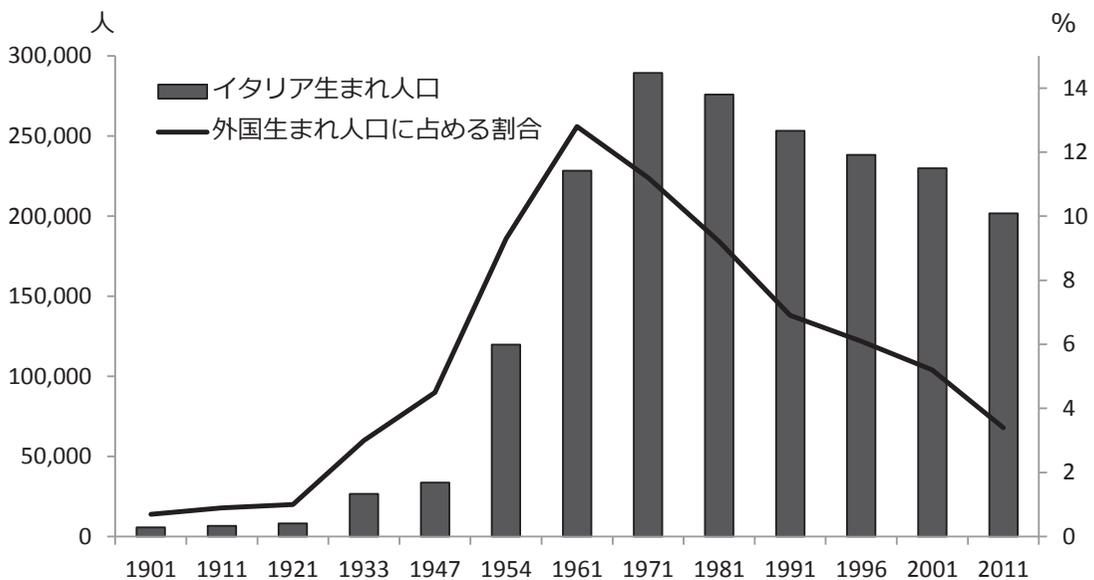


図1 オーストラリアにおけるイタリア生まれ人口（1901～2011年）
（1901-1996年についてはDIMA（2011: 18-19）、2001年と2011年についてはABSのデータをもとに作成）

表1 都市圏別イタリア生まれ・家庭で話す言語をイタリア語とする人口 (2011年)

都市圏	イタリア生まれ	イタリア語
シドニー	41,777	68,564
メルボルン	68,799	112,682
ブリスベン	6,359	10,544
アデレード	19,478	31,514
パース	17,734	28,437
ホバート	588	845
ダーウィン	309	572

(ABSのデータおよび .id the population experts (2015a) をもとに作成)

Ⅲ シドニーのイタリア系人口の居住分布とライカート

1. シドニーのイタリア系住民の集住地—家庭でイタリア語を話す人口の分布から

オーストラリアの都市における出身国別の移民の居住パターンについての研究 (Burnley, Murphy and Fagan, 1997; Poulsen and Johnston, 2000; Johnston, Forrest and Poulsen, 2001) では、アメリカの都市にみられるアフリカ系アメリカ人の「ゲッター」にあたるような隔離された移民の集住地区は形成されていないとされる。しかし、イタリア系やギリシャ系、レバノン系、中国系移民については、ある程度の集住が確認されている (Johnston, Forrest and Poulsen, 2001)。

図2は、シドニー大都市圏を対象に、SLA⁸⁾別にみた1991年と2011年におけるイタリア語を話す人口の分布を示している。1991年についてみると、シドニーのCBDから5～10kmに位置するDrummoyne, Ashfield, Concord地区において、それぞれのSLA内の10%を優に越える集積が確認できる。隣接するStrathfield SLAにおいても地区内の5%を越えるイタリア語人口がみられる。これらの地区は2011年においても同様に、イタリア語を家で話す人口の高い集積を維持してい

る。イタリア系移民の2世・3世が増加するにつれて、一般的にはイタリア語を話す人口の減少が見込まれる中、シドニーのCBDの西方に位置するこれらの地区では、依然として高いイタリア語人口を維持している特徴がみられる。

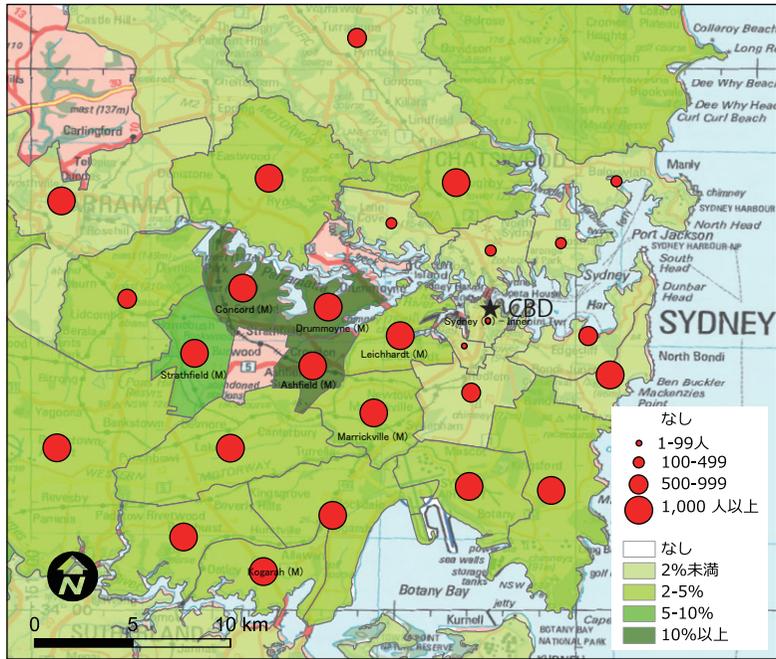
2. ライカートにおけるイタリア系住民のビジネス展開とコミュニティ活動

上で示したように、ライカートは今ではイタリア系住民の割合が突出して高い集住地区ではなく、集住地の一つという位置づけにある。しかし、同地区は、1970年代に入るまでは、シドニーに移住したイタリア系移民にとっての最初の拠点であり (Solling and Reynolds, 1997: 226)、イタリア系移民の住宅とビジネスが集中していた⁹⁾ (Burnley, 2001; 2005)。

現在のライカートは、シドニーの中では高級住宅地であり、住民の世帯所得は平均よりも高く (.id the population experts, 2015b)、管理職・専門職の割合が平均よりも高い (.id the population experts, 2015c)。しかし、イタリア系移民の多くがオーストラリアに到着した1950年代・60年代には、同地区は工場が多く、家賃の低い住宅地であった。当時のイタリア系移民の多くは工場労働に従事しており、職場に近く家賃が手頃であったこの地区に居を構えた (Burnley, 2001; Mura and Lovelock, 2009)。

さらに、これらの住民を顧客とする飲食店やその他のサービスを提供するビジネスが発展し、イタリアの文化行事や祭典が開催され (Widhyastuti, n.d.: 15)、ライカートはリトル・イタリー (Little Italy) と呼ばれるようになった。イタリア系経営者による店舗が特に集中したのは、同地区とピーターシャム (Petersham) の間を走るパラマッタ・ロード (Paramatta Road) とこれと交差してライカート側にのびるノートン・

1991年



2011年

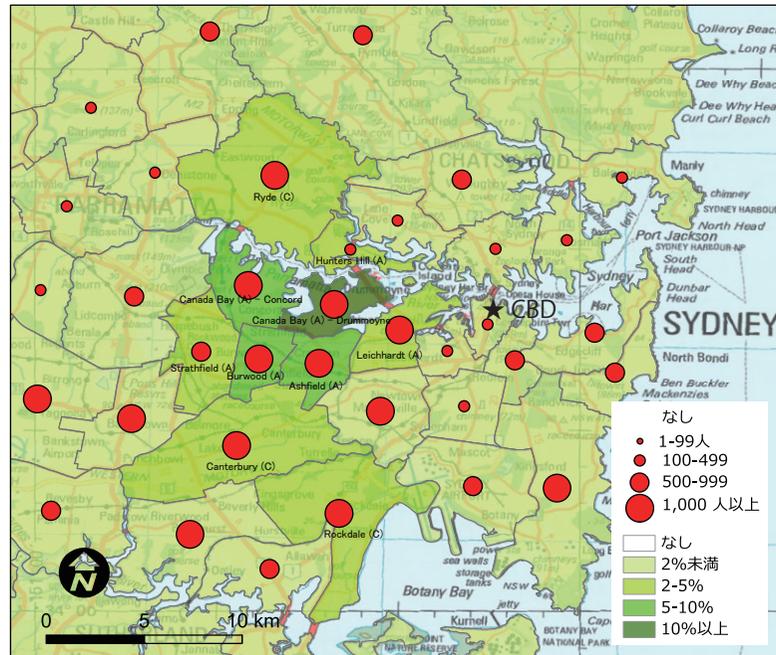


図2 シドニー大都市圏におけるイタリア系住民の分布 (1991年, 2011年)
 家でイタリア語を使用する人口をSLA統計区で集計した値を使用した。
 (ABSのデータをもとに作成)

ストリート (Norton Street) 沿いであった (図3)。Burnley (2001) の調査によれば、店舗数は1976年には170余りで、デリカテッセン、ベーカリー、レストラン、カフェなど食材・飲食関連に加え、美容院、旅行会社、不動産事務所、自動車整備などのサービス業の店もあった。しかし、1970年代以降は、イタリアから新たに来る移民が減少し、2・3世がハーバーフィールド (Haberfield) やファイブドック (Five Dock) など北西部の郊外へ移動したことにより、ライカートのイタリア系住民は減少していった (Burnley, 2005; Mura and Lovelock, 2009)。イタリア系経営者の場合、自宅を他地域に移した後もビジネスはライカートで継続していたが (Widhyastuti, n.d.: 2), そのような店舗も次第に減少していった。

一方、コミュニティ組織の多くは移転せず、例えば、そうした組織の一つCo.As.It.はノートン・ストリート沿いに事務所となる建物を所有し、若い世代に向けたイタリア語教育や高齢者向けの福祉サービスなどの活動を行っている。

IV イタリア系住民にとってのイタリアン・フォーラム

1. イタリアン・フォーラムの建設と現況

1980年代末、ライカートではイタリア系住民が減少しつつもまだビジネスは持続していた。この時期にはライカートの再開発が進められており、その大きなプロジェクトの一つが水道局所有の空き地を利用したイタリアン・フォーラムの建設であった (Stafford Moor & Farrington PTY LTD, 1994)。この土地は、入植開始200周年の記念として、1988年にニューサウスウェールズ州政府からイタリア系コミュニティに寄贈された (Widhyastuti, n.d.: 14)。イタリアン・フォーラムの建設計画と運営に携わったのは、非営利組織のItalian Forum Limitedで (Dumas, 2014), メンバーは芸術家や住民で構成されている。これに不動産業者と市役所が企画に加わって、イタリアン・フォーラムが建設されることとなり、1999年12月に完成した。

イタリアン・フォーラムは、商業・住宅・文

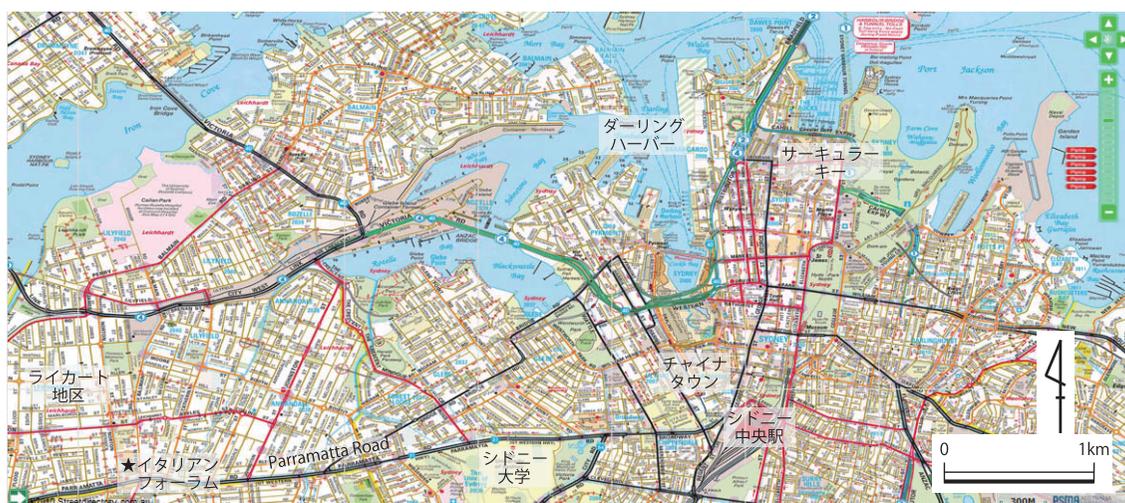


図3 イタリアンフォーラムの位置

(<http://www.street-directory.com.au/nsw> のウェブサイトをもとに作成)

化の複合施設で、観光施設になることも目指されていた。設計は、連邦政府に勤める著名なイタリア生まれの建築家Romaldo Giurgolaによるもので(Widhyastuti, n.d.:14)、イタリアを意識した建築デザインとなっている。施設は、中央の広場(piazza)を建物が取り囲む構造をとり(図4)、ノートン・ストリートにつながる通路から広場に至る階段はローマのスペイン広場のものを模している(図5)。建物の外観にはトスカナ地方をイメージしたクリーム色・赤茶色・深緑色が使われた(Burnley, 2005:382; The Italian Forum, n.d.)。



図4 イタリアン・フォーラム
(2009年 吉田撮影)

階段から広場に向かって1階の右側に図書館、左側にイタリアン・フォーラム文化センター(図6)の二つの文化施設が置かれ、その間にレストランとカフェが配置された。2階には主にファッション関連の店およびサービス業の事務所、3階から5階までは住宅という造りになっている。敷地内の各セクションはイタリアの著名な都市にちなんで、ナポリ、ミラノ、ローマと名づけられた。

完成当時にはほとんどの店はイタリアをイメージしており、飲食店、ギフト店・洋装店のいずれも多くのお客様でにぎわった(Davie, 2003:



図5 ローマのスペイン広場を模した階段
(2009年 吉田撮影)



図6 イタリアン・フォーラム文化センター
(2015年 吉田撮影)



図7 イタリアン・フォーラムを散策する台湾からの観光客
(2009年 吉田撮影)

Dumas, 2014)。観光客も多く、旅行業者との提携により台湾からの団体客が週に4回バスで訪れていた(図7)(Dumas, 2014)。しかし、2000年代後半から地元の顧客および観光客が減少し¹⁰⁾、2013年以降には閉店が相次いだ¹¹⁾。

イタリアン・フォーラムは、店舗数の減少に直面するだけでなく、イタリアのイメージを維持するのも困難になりつつある。例えば、2015年3月時点で、営業している飲食店10軒のうちイタリアの味を看板にしているのは、イタリア系の一家が家族で経営する3軒のレストラン・カフェとその他1店舗であった(表2)。イタリア以外の民族の味を看板とする店舗も現れ、イタリアのイメージの揺らぎに拍車をかけた。例えば、2013年にイタリアン・ジェラートの店が閉店した後、その場所でインド料理のレストランが開店準備をしていた。この店は内外ともに改装されて店内のテーブルにもクロスがかけられていたが開店せずに終わり、2014年には店名の異なるタンドーリの専門店になっていた。2015年3月には、この店もなくなり、これにかわってフランス料理店が開店していた¹²⁾。なお、飲食店や販売店の入れ替わりが頻繁であるのに比べ、法律関係の事務所は比較的安定しており、2009年にあった5事務所のうち一つは閉鎖したが、残りは継続している。しかし、こうした事務所の経営者がイタリア系であるかどうかは不明である。

表2 イタリアン・フォーラムにおけるビジネスの変化(2009～2015年)

種類	2009年	2015年
カフェ・レストラン	16	10
ファッション・その他販売	26	14
サービス(民間)	16	13

(現地調査により作成)

このように、イタリアン・フォーラムは、全体としては商業的に行き詰まっており、市役所による再生策も提示されてはいるが¹³⁾、有効な打開策は見いだせずにいる(Dumas, 2014)。そして、イタリアのイメージの喪失という点では、追い打ちをかけるように、イタリア系コミュニティの文化活動として使う目的で作られたイタリアン・フォーラム文化センターに、俳優養成所Actors Centre Australiaが開校した。

2. イタリアン・フォーラム文化センターの所有権争い

顧客を誘引する力を失い、イタリアのイメージを失いつつあるイタリアン・フォーラムであったが、2014年にCo.As.It.がイタリアン・フォーラム文化センターの所有権を主張し、俳優養成所の立ち退きを求める裁判を起こした。Co.As.It.の職員からの聞き取りと新聞記事(Dumas, 2014)から得られた情報によれば、裁判までの経緯は以下の通りである。

イタリアン・フォーラム文化センターは、建物自体の建設はされたものの内装は未完のままに放置され、そこでは目立った活動は行われなかった。しかし、2009年に連邦政府から予算が下り、2012年に内装が整えられ、350席を持つ劇場と会議室、調理教室の部屋、バーが作られた。そこでActors Centre AustraliaがItalian Forum Limitedと20年の契約を結び、2013年9月に俳優養成所を開いた。これに対し、Co.As.It.が2014年に俳優養成所の閉鎖とイタリアン・フォーラム文化センターの購入権を求め、裁判を起こした。ライカート市長および市役所はCo.As.It.側を支持し(Dumas, 2014)、同年12月には、Co.As.It.が購入権を獲得した。

このように商業的利益が見込まれにくいイタリアン・フォーラムにおける、ほとんど放置状態

だったイタリアン・フォーラム文化センターを、Co.As.It.はなぜ所有する気になったのだろうか。同組織の職員は、イタリアン・フォーラム文化センターの所有権を主張する理由として、以下の点を挙げた¹⁴⁾。

- ・イタリアン・フォーラムは、入植200周年の記念にイタリア系コミュニティに贈られたものであり、その趣旨を尊重すべきである。
- ・この場所はイタリア系コミュニティの歴史の象徴である。
- ・この施設を「イタリア文化センター」として維持したい。

また、イタリアン・フォーラム文化センターはイタリア系移民と関わる同地の歴史と文化を今後伝えていく上で重要な役割を果たすはずであると言う。さらに、同施設を利用した今後の抱負について以下のように語っている。

私たちは、ノートン・ストリートにイタリアン・ハブ (Italian Hub)¹⁵⁾を作る計画を立てていて、条件に合う物件を探していたところだったので、この建物の購入を決めました。もともとフォーラムをコミュニティ活動の場にしようという考えがあって、それでやっとフォーラムが建って、これから時間はかかるかもしれないけど、イタリアン・ハブを作っていこうと思ったのです (筆者による和訳)。

このように、イタリアン・フォーラム文化センターの購入について、Co.As.It.はビジネスでの利用は考えていない。劇場を使った文化イベントを開催するなど、ノートン・ストリートにおけるイタリア系住民にとっての求心力のある場所づくりをめざしている。

V アイデンティティの拠り所を求めて

これまでみてきたように、オーストラリアのイタリア系コミュニティは、戦後のオーストラリアの多民族化を牽引する移民集団であった。1960年代には外国生まれの人口としては、イギリス生まれに次ぐ規模を持っており、大都市の特定地区に集住した。イタリア系住民が集まった地域では、イタリア系企業家の商業活動が活発化し、コミュニティ組織が発達し、イタリア系コミュニティの生活・商業・コミュニティ活動の拠点となった。

本稿でとりあげたシドニー・ライカートは、このようにイタリア系住民が集住し、商業地としても栄えた代表的な地区の一つである。しかし、1970年代以降、イタリアから新規に流入する人口が減少し、居住地の分散も進むと、ライカートもまたこの影響を受けて、イタリア系住民を失い、イタリア系企業家によるビジネスも衰退した。

しかし、調査の結果明らかとなったのは、シドニーのイタリア系住民にとって、同地区はコミュニティの歴史的シンボルとしての価値を失っていないということである。本稿で焦点を当てたイタリアン・フォーラムについては、空き地に建てられた新しい施設であり、1950年代・60年代のイタリア系住民の記憶を反映する要素は皆無である。そのような意味では、この施設自体は、イタリア系コミュニティにとっての歴史的シンボルではない。現在イタリアン・フォーラム文化センターの購入に意欲的なCo.As.It.についても、内装が整えられるまで10年以上放置してきたことから、この建物や場所に強い思い入れがあったとは考えがたい。

しかし、Co.As.It.は、イタリアン・フォーラム文化センターの内装が整えられたことによって、

この施設がライカートのイタリア系コミュニティの歴史と文化的遺産を次世代に伝える媒介になると考えており、ライカート市長と市役所は、裁判におけるCo.As.It.の主張を支援した。商業的な利益を上げられそうな事業主を退けて、非営利の移民コミュニティの組織に経営をゆだねようとするのは、これを支持するイタリア系住民の存在があるからこそであろう。ライカート市役所職員の中には、イタリア系移民の2世も多くいる。また、Co.As.It.が購入の資金を準備できたのは、主にイタリア系住民で構成される同組織のメンバーの同意があるためだと考えられる。イタリア系移民の生活の歴史が刻まれたこの地で、イタリア系コミュニティの場所としての特徴が失われつつあるからこそ、ここを拠点としたコミュニティ活動の必要性を感じ、コミュニティの中で培われてきたイタリア文化を分かち合い、次世代に伝えるための場所を求めているのではないだろうか。

Co.As.It.は2014年12月の裁判の判決でイタリアン・フォーラム文化センターの購入権を認められたが、2015年3月に筆者がここを訪れた際には、大きな変化は見られなかった。俳優養成所は同じ場所で経営を続けており、受付の職員との会話では、閉鎖の話は聞いていないとのことであった。このように、Co.As.It.によるイタリアン・フォーラム文化センター購入の影響は、現時点では確認できていない。したがって、この施設の獲得が、ライカートでのイタリア系コミュニティの拠点の再構築につながるかどうかについては今後さらに調査を続けていく必要がある。

【付記】

本稿は2012-2015年度科学研究費補助金「ネオ・リベラリズムの進展とアジア化するオーストラリア社会に関する人文地理学的研究」、基盤研究(B)(海外学術)研究代表者 堤 純(課題番号24401036)による成果の一部であり、本稿の骨子は、日本地理学会2015年春

季学術大会(2015年3月28日:日本大学)において発表した。

ライカートでの現地調査にあたり、聞き取りにご協力いただいたライカート市役所およびライカート市立図書館の職員の方々、Co.As.It.職員の方々にお礼申し上げます。また、自治体国際化協会(CLAIR)シドニー事務所の職員の方々にも仲介の労をとっていただきました。末筆ながら以上記して感謝申し上げます。

注

- 1) 北欧やドイツからの移民については、出身国が英語圏ではないもの人種的にアングロ・サクソンに近いと見なされていた(Jupp, 1998: 100)。
- 2) ライカートは、シドニー中心部からみて西に約5kmの位置にある。
- 3) ライカート市職員およびCo.As.It.の職員への聞き取り調査にあたっては、調査依頼と日程調整について、自治体国際化協会シドニー事務所の協力を得た。また聞き取りの際には、同事務所の職員が筆者に同行している。イタリアン・フォーラムの運営事務局については、2009年にEメールによる調査依頼をしたが返信はなく、2014年9月のシドニーでの現地調査に際し、自治体国際化協会シドニー事務所を通じて再び調査依頼をしたが、聞き取り調査は実現できなかった。
- 4) イタリア生まれの人口および家庭におけるイタリア語話者についての都市圏別およびライカートの人口は、.id the population experts (2015) のサイト(<http://home.id.com.au>) からデータを得た。
- 5) ライカートのイタリア系移民の歴史については、Solling and Reynolds (1997) に詳述されている。1970年代の同地区のイタリア系住民の居住分布と商業活動については、Burnley (2001) の研究を参考にした。イタリアン・フォーラム建設の経緯および開設当時の様子を伝える文献として、ライカート市役所から建設許可の申請書(Stafford Moor & Farrington PTY LTD, 1994)、ライカート図書館からシドニー大学の学生による報告書(Davie, 2003)を得た。また、Widhyastuti (n.d.) が、2006年提出の博士論文を要約した論文をインターネットで公開しており、そこで、イタリアン・フォーラムの開設の経緯と2000年代前半の状況についての情報が得られた。他に、ライカートのリトル・イタリアーとしての本物らしさについて調査したMuraらの研究(Mura & Lovelock, 2009)においても、イタリアン・フォーラムについての説明がある。2014年のイタリアン・フォーラムの状

- 況については、The Sydney Morning Heraldの新聞記事 (Dumas, 2014) も参照した。
- 6) 近年イタリアで失業中の若者がオーストラリアの親族を頼って移住するケースが増えている (Marchese, 2014)。現在のところ、同国のイタリア系住民の年齢構成を大きく変えるほどではなく、永住するかどうか不明であるが、2011年から2014年にかけてオーストラリアにおけるイタリア生まれの人口は増加に転じた。
 - 7) 2011年におけるオーストラリア総人口(22,340,260)に占めるイタリア生まれ人口の割合は0.9%である。
 - 8) SLAは、基本的には市町村領域内に複数設定される。人口密集地と過疎地域では各SLA内に含まれる人口のばらつきが多い難点があるが、ABSのセンサスデータのうち、過去にまたがる時系列データ (TSP: Time Series Profile) の集計にはこのSLAが採用されているため、本稿でも時系列比較のためにSLA単位の集計データを採用した。各統計地区の詳細な説明はABSのホームページに公開されている。http://www.abs.gov.au/websitedbs/D3310114.nsf/4a256353001af3ed4b2562bb00121564/6b6e07234c98365aca25792d0010d730/\$FILE/Changes%20to%20Geographic%20Areas%20between%20Censuses.pdf (2015年5月31日閲覧)
 - 9) メルボルンには、シドニーよりも規模の大きいイタリア系コミュニティがある。カールトン (Carlton) 地区は、1950年代・60年代にイタリアからの移民の集住地となり、同地区のライゴン・ストリート (Lygon Street) 沿いには多数のイタリア系経営者による店舗が集まったことから、リトル・イタリーとよばれている。
 - 10) 2009年8月に初めて筆者がイタリアン・フォーラムを訪れた際、空き店舗も出始めており、新聞記事 (Dumas, 2014) にあった「台湾からの団体客」に該当すると思われる観光客はいたものの、全体として閑散とした印象があった。
 - 11) 顧客の減少の原因については、ライカート公立図書館の職員やCo.As.It.の職員への聞き取りにおいて、イタリア系住民の減少や外部からの訪問者が駐車場を利用できなかったことなどが挙げられたが、いずれも推測である。なお、外部からの訪問者による駐車場利用は2013年より可能となったが、状況の改善にはつながらない。
 - 12) 以上、筆者の観察による。
 - 13) こうした再生策の一環として、ライカート市役所は、2013年よりRenew Australiaの「ライカード再生計画 (Renew Leichhardt Project)」に協力している (Leichhardt Municipal Council, 2013)。これは、芸術や文化活動などに対し、空きスペースを無償で提供して市街地の活性化を促す企画で、ニューカッスル (Newcastle) で効果があったことから、現在ではオーストラリア全国で展開されている。イタリアン・フォーラムもこのプロジェクトに参加しており、2014年9月に空き店舗の一つに子供向けの芸術ワークショップのスタジオが開設された。
 - 14) 2014年9月12日に聞き取りを実施した。
 - 15) イタリア系コミュニティの中心あるいは拠点といった意味になる。

文 献

- ABS (Australian Bureau of Statistics) (2015) : Estimated resident population by Country of Birth: 1992 to 2014. http://stat.abs.gov.au/Index.aspx?DataSetCode=ERP_COB [Cited 2015/05/08]
- Burnley, I. H. (2001) : *The impact of immigration on Australia: A demographic approach*. Oxford University Press.
- Burnley, I. H. (2005) : Generations, mobility and community: Geographies of three generations of Greek and Italian ancestry in Sydney. *Geographical Research*, 43 (4), 379-392.
- Burnley, I. H., Murphy, P. and Fagan, B. (1997) : *Immigration and Australian cities*. The Federation Press.
- Davie, R. (2003) : *Changing urban patterns in Leichhardt*. Unpublished report for Geography 1002 Human Environments in conjunction with the Science Talented Students Program at The University of Sydney.
- DIMA (Department of Immigration and Multicultural Affairs) (2001) : *Immigration Federation to Century's end 1901-2000*. <http://www.immi.gov.au/media/publications/statistics/federation/federation.pdf> [Cited 2015/05/08]
- Dumas, D. (2014, June 7) : Leichhardt's Italian Forum goes from retail tiger to white elephant. *The Sydney Morning Herald*. <http://www.smh.com.au/nsw/leichhardts-italian-forum-goes-from-retail-tiger-to-white-elephant-20140606-39oyr.html> [Cited 2015/05/08]
- Johnston, R., Forrest, J. and Poulsen, M. (2001) : The geography of an EthniCity: Residential segregation of birthplace and language groups in Sydney, 1996. *Housing Studies*, 16(5), 569-594.
- Jupp, J. (1998) : *Immigration*. 2nd ed. Oxford University

- Press.
- Leichhardt Municipal Council. (2013) : Renew Leichhardt.
<http://www.leichhardt.nsw.gov.au/Community/Business/Business-Programs/Renew-Leichhardt> [Cited 2015/05/11]
- Marchese, D. (2014, November 28) : Economic devastation in Europe prompts new wave of Italian migration to Australia. *ABC News*.
<http://www.abc.net.au/news/2014-11-28/economic-disaster-prompts-spike-in-italian-migration-to-australia/5927386> [Cited 2015/05/08]
- Mura, P. and Lovelock, B. (2009) : A not so Little Italy?: Tourist and resident perceptions of authenticity in Leichhardt, Sydney. *Tourism, Culture and Communication*, 9(1-2): 29-48.
- Poulsen, M. F. and Johnston, R. J. (2000) : The ghetto model and ethnic concentration in Australian cities. *Urban Geography*, 21(1), 26-44.
- Solling, M. and Reynolds, P. (1997) : *Leichhardt: On the margins of the city. A social history of Leichhardt and the former Municipalities of Annandale, Balmain and Glebe*. Allen & Unwin.
- Stafford Moor & Farrington PTY LTD. (1994) : Italian Forum: Leichhardt development application, submission Document B General report. [Unpublished document]
- The Italian Forum. (n.d.) : The Italian Forum.
<http://www.theitalianforum.com/pages/home.php> [Cited 2015/05/08]
- Widhyastuti, I. (n.d.) : Perceived ethnienhub: Suburban land development and migrants' place-making. [Cited 2009/11/20]
- .id the population experts. (2015a) : Welcome to the Australia Community Profile.
<http://profile.id.com.au/australia> [Cited 2015/05/08]
- .id the population experts. (2015b) : Leichhardt Council area Household income.
<http://profile.id.com.au/leichhardt/household-income> [Cited 2015/05/08]
- .id the population experts. (2015c) : Leichhardt Council area Employment status.
<http://profile.id.com.au/leichhardt/employment-status> [Cited 2015/05/08]